

令和元年11月1日発行 春燈/第76巻第12号(毎月1回1日発行) 昭和21年7月22日第3種郵便物認可

春燈

2019 December

12月号



主宰の句

安立公彦

樟大樹九月の風を豊かにす
(桐生)

淡々と秋蚕をかたる機織女

眼裏にのこる秋日の赤城山

旅人をつつむ夕日の草紅葉

とろろ汁一会の酔ひの醒め易し





安住敦の句

石路咲いて歲月つもるばかりなり

『歴日抄』昭和三十八年

石路の花は濃い緑の厚い葉と莖を持ち寒くなるころ咲く黄色い花は地味だが遠くからでも目につく。掲句は万太郎師が急逝した昭和三十八年の句。敦はこれから春燈を守ってゆく決意を固め様々な思いを巡らしているうちに、もう石路が咲いて今年も終わってしまったのを知る。

敦の方太郎師への深い思慕、時は止まること無く過ぎて行き、月日は流れ去る事を教えられます。

渡辺 若菜



安住敦の句

麦秋のしんかんたるに耐へみたる

『古曆』昭和二十九年

〈しんかん〉が「辛艱」か或いは「深閑」なのか、私には判断いたしかねるが、上五の〈麦秋〉という明るいイメージに続く、下五の〈耐へみたる〉はあまりに対照的である。これは師ご自身が言って居られるように「私は常に市井の一隅で、静かに思いに耐え、しみじみとおのが人生の哀感をうたつていればいい」という姿勢が窺えるように思えてならない。

河本由紀子

燈下集



○ 溝越教子

一斉に下校の子らや稲雀

歩く事一番大事野分暗

頭上より威嚇の鴉すさまじや

柳散る野暮用ばかり又ふゆる

次男坊が父になるらし実むらさき

○ 齋藤晴夫

仮の世に空蟬しばし情残す

蜻蛉の複眼をもてことを見る

小鳥来る野川きらきら奏でけり

糸とんぼ生くるに肩の荷軽からむ

大荷物を敬老といふ優しき日

○ 河崎國代

山道に鈴の響くや秋気澄む

腹の虫の抑へ難きやおけら鳴く

つづれさせ老いの用意を急かさるる

魚籃観音もままならぬ秋不漁

猫に鈴ねずみ思案の良夜かな

○ 片桐てい女

木天蓼に三毛来て昼を夢ごこち

中ん栗の左右は犠牲兄妹

魯田の羊群牧舎は見送らる

三毛の耳空に立てたり鱗雲

少年の隠しは木の実の等級別

○ 上野 進

稲光真夜の山並研ぐごとく

海神の喜怒を顔に秋の海

一頻り過疎の散華や曼珠沙華

褒めをけば皆和やかに暮の秋

沈黙のこころを湿す新走り

○ 石橋 邦子

北浦の色なき風や素十の忌

あさがほの小さくなりしかな女の忌

下野へ帰る子送る刈田道

屑藁に隠れてゐたり秋の蛇

吹き溜まる落葉の嵩のうづたかし

○ 河本由紀子

丹沢連峰稜線確と秋気満つ

台風一過われに返りて空の青

ときめきの卒寿間近や秋日燦

爽やかや生るるも逝くも独りにて

ふと目醒む独りの夜半や月清に

○ 永井 恵子

酔芙蓉花の果つれば地に戻る

紅萩や分限者の堀低からず

蟋蟀の鳴くだけ鳴いて畢はりけり

秋晴やお洒落に決めて夫退院(夫検査入院)

いつの間の祝はるる身や敬老日

○ 荒井ハルエ

平飼ひの大きな卵涼新た

居残りの子に鈴虫のよく鳴けり

輪の中に校長先生盆踊

花野行く母の声するところまで

焙じ茶の庫裡より香る秋彼岸

○ 石田 康明

馬頭観音バス停前や曼珠沙華

楽屋まで届く夕餉の衣被

何ごとも前夜は忙し穴惑ひ

身に入むや断髪式の国技館

冬近し朝から空き家を壊す音

○ 宮崎 洋

酔芙蓉すぼみてけふを抱きけり
ながながと文を書きをりちちろむし
またたいて星はちちろと交信す
俊寛のけふに便りの流れ星
天高し悠仁さまの五つ紋

○ 持田 信子

小さな秋さがしに箱根黒たまご
秋の七草ひとつ浮かばぬもどかしさ
セスナ機の頭上かすむる真葛原
ワイン片手に窓辺にたちぬ良夜かな
後夜覚めて夢のつづきやちちろ虫

○ 平沢 恵子

初秋や水琴窟の音に飽かず
鶏頭を熱くしてゐる鉄路かな
渡し場に人語らする水の秋
かなかなやふたりつきりの鬼ごっこ
階段に来てゐる日暮茸飯

○ 中里 よし子

草に伏す蝶にも秋思あるらしき
贈呈の一書重たし椿の実(稟様)
耕作放棄の畑の荒れざま九月尽
雨上がり萩のしらつゆ光り合ふ
命終は知らず夜ごとの月仰ぐ

○ 木村 みどり

秋晴やほほゑみ美しき白寿媿
色あする社殿の彫りやつづれさせ
秋茄子のワイン煮甘く赤城暮る
赤城山てふ男の酒の夜長かな
煎薬の香をあふれさす夜長かな

○ 大西 由美子

スマホ見る皆俯きて天高き
仲秋やバス停二つ歩く宵
新米やただそれだけの塩むすび
釣瓶落し行つて帰つてポストまで
掛け置くや明日は慶事の秋袷

余言

安立公彦

平凡な日々の幸せ稲の花

山内 四郎

「平凡」という言葉は使い古されている。「日々の幸せ」もまた同じ。しかし、「平凡な日々の幸せ」には、安らぎの、こころの落ちつきが感じられる。それは「あんじん」の思いに通う、全ての人の願いである。

この句は結語を「稲の花」で締めている。稲が成長して穂孕みの頃になると、稲の花が咲く。故郷の稲田には、今もそういう成育と、そのあとの稲刈りが続いていることだろう。「稲の花」が一句を現実化している。

相模野の空晴れわたる野紺菊

松橋 利雄

「祝・風聴くや」の前書が付いている。先般出版された、三上程子句集『風聴くや』の祝句である。程子さんの住まはは神奈川県相模原市、まさに「相模野」だ。

「野紺菊」は野菊の一種。うす紫の頭状花が目惹く。この句集は程子さんの第二句集。一見取りどりの佳句に引

き込まれる。〈何もしてやれず草笛母に吹く 程子〉の句など読む度に頷きを重ねるばかりだ。この句「空晴れわたる」に、作者の『風聴くや』への祝いの思いが出ている。

水やるたび苦瓜の数かぞへ視る

松本 峰春

ここにもひとり「苦瓜」愛好者を見た。九月に入ると残暑は厳しい。毎日の早朝と夕刻の苦瓜への水遣りは欠かせない。おそらく作者もそうだったことと思う。

この句を見ていると、作者の「苦瓜」への思いが伝わってくる。葉の茂みに小さい花が点々と咲き、その花の幾つかに、小さい苦瓜の実を見つけた時の悦びは大きい。更にそれらの実は成長する。垂れる苦瓜が朝日に揺れる景は善い。「かぞへ視る」に作者の思いを見る。正にその通り。

風踏んで影踏んで秋惜しみけり

近藤 牧男

桐生勉強会での作。桐生は市中を離れると坂が多い。会場の、桐生ランドホテルの辺りもそうだった。この句には、そういう坂みちを歩いている作者の姿が見える。

「影踏んで」は良く分かる。入り日を背に歩む時など、自らの長い影を踏むかに歩くのが、殊に印象深い。「風踏んで」はどうか。これは動作ではなく意識の表現だ。秋冷の頃となると風の冷気が身を包み、足許をつつむことが多

い。「風踏んで」は正にその感覚である。

ふる里の稔り田朝の匂ひかな
菅澤 陽子

「稔り田」は「稲田」。稲穂を豊かに揃えている秋の田園の景は、古里を遠く離れている人にとつては、忘れられない風情と言えよう。作者もそのひとりか。

久方ぶりに見る古里の「稔り田」。思わず深呼吸でもしたくなる。吸う息、吐く息、そこには正に古里の思いがある。それは「朝の匂ひ」である。稔り田の彼方に連なる山の上に、はや夜明けの朝日が昇る。田園を離れた人たちにとつては、えも言われぬ「朝の匂ひ」である。

木樫咲く店主ひとりの理髪店
大文字孝一

初見は九月本部句会。「店主ひとりの理髪店」は、石川桂郎氏を思い出す。父を継いで理髪師となり、「鶴」に入会。その傍ら横光利一に師事して小説を学び、『俳人風狂列伝』で読売文学賞を受賞する。更に蛇笏賞も受賞。

この句、上五の「木樫咲く」に独自性がある。街の一隅にある理髪店。入口の脇に白い木樫が咲いている。手入れの届いた枝ぶりだ。客は馴染みの人のみ。慎ましくも毅然とした店主の姿が見えて来るような句である。

秋天を見上げ靴紐しめ直す
神田 恵琳

人の日常には、こういう瞬間があり得る。その自覚の契機は、例えば散歩の途次だったり、また先日の勉強会のような場だったりさまざまだ。弛んだ靴紐を締め直すと言うことは良くあること。仲間は先に過ぎてゆく。ひとり野辺に片膝ついて締め直す靴紐である。

この句はしかし常の動作から自覚に進む。「秋天を見上げ」は、ふとした動作だが、そこに天啓が閃く。自覚である。「靴紐しめ直す」は、その自覚の、わが身への確認と言えよう。自覚、天啓など固い言葉を使ったが、この句には、そういう新生の思いが感じられよう。

色あする社殿の彫りやつづれさせ
木村みどり

桐生勉強会での作品。この「社殿」は桐生天満宮。権現造りと呼ばれる神社建築の様式で、崇高な外観を持つ建物である。一見してその歴史が偲ばれる。外壁にはみごとな彫刻が施されている。しかし保存が疎かだ。彫刻の部分欠けも見られる。本殿の小庭は雑草が伸び放題だ。

この句の「色あする」は、それらの現況を活写している。「つづれさせ」が効果的だ。境内には大樹の樫が茂っている。そういう景などにも思いの及ぶ句である。

春星賞受賞作（12句）

畑守の詩

佐俣まささを

古池に映ゆる白雲若楓

秋風や藁屑を噴く脱穀機

田仕舞の煙ひと筋夕鴉

大黒の小槌追ふ獅子里神楽

剪定の脚立の軋みぶだう棚

梅散るや枯山水の砂の襞

淡雪や堆肥積み置く猫車

山里や日溜りに敷く花筵

桑解くや光となれる藁のしべ

峰越に光る霊峰田鋤馬

婦唱夫随てふ絆あり豆の飯

初蟬や雨垂れ光る堂庇



春星賞受賞作（12句）

横浜 田中嘉信

薫風や港の見ゆる丘に立つ

語らひの木椅子明るし新樹光

洋館の並ぶ山の手白日傘

青蔦の自在白垂の館かな

風青し明治を残す赤煉瓦

汽車道に賑はふ親子桜の実

灯涼し瓦斯灯の街歩きけり

梅雨深し昭和のままの漁師町

油浮く古き運河や梅雨夕焼

高々と列なすクレーン大暑かな

コンテナの国籍あまた西日中

出港の白き客船晩夏光



当月集

安立 公彦選



○ 近藤 真啓

山を呑む黄金の穂波秋暑し

八千草に音なき風の吹き来り

居十大姉並びぬる文字秋桜(祖母十三回忌)

鈴虫や夜ごとに稿を研ぎ澄ませ

定まらぬ結語を如何にラ・フランス

○ 田中 嘉信

天高し国の鎮めの大鳥居

参道の薦樽ゆかし法師蟬

秋澄むや傾き合へる夫婦楠

日暮まで父と勤しむ稲架仕事

鳶鳴くや葛の葉分けの風の音

○ 小林 紫乃

古里に増ゆる空地や曼珠沙華

点々と暮しの灯あり虫の声

溪音や深山あかねの産卵期

山暮るるぬつと貌出す牡鹿かな

山しぐれ真葛原をひた走り

○ 池上 昌子

竹伐つて風の流れの変はりけり

ついて来て肩に止まりし赤蜻蛉

仲秋や歴と聳ゆる石鎚山

懐かしき上毛三山鰯雲

身に入むや御所の夕べの笙の笛

○ 山浦 紀子

焼却炉の煙突はるか秋茜

秋暑し大工の眉に鉋屑

新しきウッドデッキに秋の風

朝刊の端折り揃へ涼新た

夫に選る御鈴の音色小鳥来る

春燈の句

安立 公彦選



川風も色なき風となりけり

釣人に声かけてゆく葦の花

川縁の野いばらの実の赤らむる

永らふる吾を思ふなり秋の夜

伝令の球児疾走夏の雲

ひたすらに投げ打つ球児玉の汗

さはやかに高校球児行進す

老いてなほ野球好きなり涼新た

登校の子ら列乱れなく夏は逝く

正門に停まるバス行く秋日うけ

打ち明くる友の今なくちちろ鳴く

ハモニカを吹けば踊るや秋の蝶

朱の色に募る望郷曼珠沙華

稲雀何処へ消ゆるや里景色

東京 石原 節子

東京 遠藤 レイ

東京 鈴木としお

神奈川 葦原 葭切

啄木鳥の音色に引かれ独り旅

海に来て秋の鷗に独り言

みづうみを渡る朝風秋立てり

流木に海の鳥来て涼新た

箒目に影落としゆく秋の蝶

秋風の枝折戸叩く日暮かな

空の青宿す露草花の瑠璃

すれ違ふ人新涼の風残し

蹠跟け立つ身ほとりに添ふ萩の風

人の手に渡る稲田や黄金波

北斎の浮世絵のまま落つる滝(岐皇阿弥院が滝)

つくつくし人悲します言葉吐き

鯛にあしたがあると鳴かれけり

月今宵生くる支への一行詩

島根 土江 比露

広島 浅田セツ子

滋賀馬場節子